

九、めぐり逢い

ソヒヨンは、打たれた左の頬ほおを掌てのひらで抑えたまま、眼を血走らせ、今にも掴つかみかかりそうな表情で、春燕チュンイエンを睨にらみつけていた。

ずっと春燕の身が動いた。同時に、ソヒヨンの面差しが凍こりついた。

いつの間にか、春燕は、左手でソヒヨンの上衣の胸ぐらを掴つかみ、その右手には、ソヒヨンが常に懐ふところに忍しのばせているナイフが握つかられていた。

そして、春燕の右脚の膝は、ソヒヨンの股間を蹴蹴り上げる寸前で止めていたのだ。

「想起シアンチー（思い出した）？」

春燕は、冷たく微笑んだ。ソヒヨンの眼に、怯おびえが走った。

ソヒヨンが、ブラゴベシチェンスクの軍務知事だったニコラーエフ中將の暗殺を試みた時、不意に現れた春燕に妨害され、胸乳むちちと股間を蹴蹴られて悶絶もんぜつした。

春燕は一瞬の間に、ソヒヨンの懐のナイフを奪い取り、かつて痛めつけた箇所箇所に、左手と右の膝をあてがったのだ。あの時味わった恐怖と屈辱が、ソヒヨンの脳裡うみに甦よみがえったに違ちがいない。

「冷静に、なりましよ」

春燕は、ソヒヨンから身を離し、ユキを助け起こした。それから、股間を抑えて悶絶もんぜつしている橋口平助を見下ろして言った。

「今、喧嘩けんかしてる時、ない。この男、餌えさに、ハナさん、おびき寄せる」

平助が、苦しそうな顔を上げ、私に向けた。春燕の言葉の意味が、よく飲み込めないようだった。

私は説明した。

「私たちは、君の命を狙っている水野みずのハナさんを探している。君の噂を流して、彼女の耳にいれれば、ハナさんは、ここに来るだろう」

平助の顔がさっと青ざめた。自分の命を狙っているハナを呼び寄せるための罠わなにされようというのだから、無理もない。

「大丈夫よ」

ユキが、平助の傍らに座り、肩を抱いた。

「ハナさんにかやんと話して、許してもらおうから」

それから、俯うつむいて突っ立っているソヒヨンに歩み寄り、両手を握り、頭を下げた。

「あなたの同胞を死なせてしまった彼が憎いのはわかるけれど、今は怒りを抑えてちょうだい。ハナさんが現れるまでは、我慢して」

お願い、ともう一度頭を下げられ、ソヒョンはしばらくユキを見つめていたが、やがて頷いた。

ユキはさらに言った。

「私は、明日から、付き合いのある首領たちを回って、噂を広めるよう頼んでくるわ。ソヒョン、あなたも一緒に付き合ってちょうだい」

「わたしが？」

ソヒョンは驚き、ユキを見つめて問うた。

「なぜ、わたし。春燕じゃなく？」

「あなたと……」

ユキは俯うつむき、小さな声で言った。

「仲良くなりたから」

ソヒョンはユキを凝視した。その言葉の真意を確かめようとするかのように。

護衛の役ならば、確かに春燕のほうが腕は上だろう。しかし、春燕を連れていくとなると、この隠れ家の留守番役として平助を見張るのは、私とソヒョンということになる。

ソヒョンが、ユキの思うとおり動くとは限らないし、下手をすると、平助に危害を与えかねない。

ユキに忠実な春燕なら、私と平助の監視も任せられる。ユキは、そう思ったのだろう。

その考えに至った時、ソヒョンが私を見遣った。私は軽く頷いた。ソヒョンはユキに向かって言った。

「わかった」

翌日、朝食を終えてから、ユキとソヒョンは傳家アジャアンを去った。

彼女らを見送った後、私は崔チの洗濯屋に出かけ、「きくちさん」の正体は、橋口平助という元日本軍一等卒である事、ユキの幼馴染おとななじみだった事、ユキが戦場で日本兵に手箒てぢめにされた時に居合わせた事などを知らせた。平助が密陽ミリヤンで朝鮮人妊婦を誤って死なせてしまったことや、水野ハナが彼の命を狙っている事は伏せた。日本軍の諜報員である私や、水賊の妻であるユキの身分も明かさなかった。

「そかさか、そんな事、あったか」

聞き終わった崔は、感に入ったように大きく頷いた。

「不思議な事、あるなあ。しかも、その男と、奥さん、哈爾濱ハルビンみたいところで、また会った。ほんと、不思議。で、橋口平助は今どうしているのか」

と聞かれ、私は、

「衝撃で寝込んでしまっている」

と答えた。嘘ではなかった。前日、平助は食事も喉に通らないほど鬱々うつうつとしており、今朝も、寝室にこもったまま出てこなかった。

「元気になったら、お店に出向かせます。それまでは、私たちが看病しますよ」

「いや、出向く、必要ない」

崔は手を振った。

「実は、ロシア軍、ハルビンから齊齊哈爾に移る。私、ここにいる、商売あがったり。だから、ロシア軍に、頼んだ。齊齊哈爾まで一緒に行きたい、と」

私は息を呑んだ。

「で、ロシア軍はなんと?」

「うん、許して貰たよ」

これは好機だ、と私は思った。崔と一緒に、ロシア軍についていけば、齊齊哈爾まで安全に移動する事ができる。

そもそも、このハル濱まで旅してきたのは、齊齊哈爾に在るであろう水野ハナに会うためなのだ。

私は、逸る気持ちを抑えて、静かに問うた。

「では、齊齊哈爾に行くのですか?」

「正(はい)、行きます」

「出発は何時ですか?」

「一週間後、くらいかなあ。それまで、平助、治らなかつたら、仕方ない、ここに置いていく。あんたたち、面倒みて」

崔の店を出たあと、私は足早やに傅家甸の隠れ家へと急いだ。劉春燕に、崔がロシア軍とともに齊齊哈爾へ引越すので自分も同行したい、と願いだした。

「だめ」

春燕は言下に拒否した。

「今、ユキさん、いない。ユキさん、帰てきたら、頼め」

「しかし、ユキさんは何時帰ってくるかわからない」

私は、なおも言い募った。ここで引き下がるわけにはいかない。ハナと再会できる絶好の機会なのだから。

「ロシア軍は、一週間後には移動するそうだ。ぐずぐずしていたら、機会を逃してしまう」

「だめだ!」

春燕は、そう叫んで、私の胸ぐらをつかんだ。

「おまえ、日本の軍人、私の敵、支那人の敵!」

私は怯んだ。

彼女の、憎悪に満ちた眼差しは、どこかで見たことがあった。

そう……。

朝鮮人の妊産婦を殺害した橋口平助を許そうとしないソヒョンの眼差し。

私たち日本軍を「東洋鬼」と罵った台湾の少女たちの眼差し。

ユキを犯した井口虎吉を責め苛んだ時の、水野ハナの眼差し。

「日本人、信用しない。日本の男、信用しない。日本の軍人、絶対に信用しない」

そう喚いて、春燕は私を突き飛ばした。私は床に尻餅をついた。

ふと、私の背後に人影が立った。

振り向くと、橋口平助だった。眼を見開き、唇を震わせている。

「お前、斉齊哈爾に行く。私と、あいつ、二人きりになる」

春燕が、私の胸ぐらから手を離し、平助を一瞥して言った。

「私、あいつ、殺すかも……」

平助の面差しが慄然と歪んだ。春燕は、眼に涙が浮かべながら言った。

「日本人、憎いから……」

そう言い捨てて、春燕は、部屋から出ていった。

部屋には、私と橋口平助が二人、取り残された。

平助は、ちらりと私に眼差しを走らせ、すぐに眼を逸らした。肩をすぼめるようにしてうなだれている。

色の白い、おとなしそうな、優しそうな面立ちの平助。

密陽で、妊産婦を誤って射殺して山に逃げ、崖から落ちて記憶を失い、崔に救われてこの哈爾濱に来てからというもの、真面目に懸命に働いたのだろう。

だが、彼が忘れたであろう過去が、私たちと出会ったことよって甦った。彼の脳裡を占めているのは、罪悪感と、自分の命を奪おうと狙っている女への恐怖に違いない。

ふと思った。

彼が兵隊に取られず、あのまま、静岡で人力車夫をしていれば、どうだったろう。いい嫁をめとり、子宝に恵まれ、幸せな日々を送っていたのではないか。

兵隊に取られてしまったがために、かつて好きだった幼なじみが手込めにされる場に立ち会い、人を殺し、恨みを買った。戦争が、彼の一生を狂わせた。

一方、私はいえ、平助と違い、自ら軍人の道を選んだ。

軍人は、国のため敵を殺す。敵を殺すための技術を叩き込まれる。同じような教えを叩き込まれた敵の軍人を殺すことは、それほどの罪悪感を抱かせなかった。

だが私は、幼い少女を殺してしまった。武器も持たず、軍服もまもっていない、幼い命、それを奪うのもまた戦争なのだ。

そして、少女を殺してしまつて以来、私に取り憑いて離れなかった罪の意識を癒してくれたのが、水野ハナとの出逢いだ。なぜ、ハナの存在が、私を苛んでいた罪悪感から解き放ってくれたのか、私はずっと自問自答していた。

今、その答えが見つかったのだ。

そう……。私も、橋口平助も、国に命じられるまま、他人の人生を破壊し、自分の人生を苦しいものにした。お国のため、命懸けで戦い、その結果、他国の人々の恨みを買ひ、深い鬱屈に陥っている。

だが、女たちは……。

水野ハナも、ソヒョンも、ユキも、春燕も、過酷な運命のなかで、自分の生き方を自分で選んでいる。そして、自分で選んだ人生を悔いている様子はない。

うなだれていた平助が、私を見た。

何か言いたげだった。私も彼に言葉をかけたかった。かけぬ言葉が見つからないまま、平助は無言で頭をさげて踵を返し、寢室へと去ろうとした。

「橋口さん」

私は、その背中に向かって言った。橋口は立ち止まり、怯えた面差しを私に向けた。

思いもよらぬ言葉が、私の口をついて出た。

「私も台湾で、誤って幼い女の子を殺してしまった」

橋口の顔が悲しげにゆがんだ。私は続けた。

「それからというもの、私は、安眠できなくなった。夢に、その女の子が、その子の母親が現れるんだ……」

「お、俺は……」

平助は、床を凝視しながら、蚊の鳴くような声で言った。

「なぜか、いろんな女の人が、夢に出てきて、なぜか、俺の事を恨んでるんです」

涙が、彼の眼から床に落ちた。

「その理由が、やっとわかりました。俺、そんなに大勢の女の人をひどい目にあわせて、とうとう人殺しまでやっていたんですね」

「これは、私の想像なんだが……」

私は、橋口平助と関わった女たち——戦争未亡人で婚約をすっぽかされた静枝、彼に貢いだ春美、そして一緒に朝鮮に駆け落ちした秀子、そして三原ユキに聞かされた話から、ずっと胸の裡に抱いており、何時かは確かめたかった疑問を、平助にぶつけた。

「君は、旅順で、ユキさんを救えなかった。その事を悔やんで、罪の意識を抱いていた。女の人に許されたくて、大勢の女の人に救いを求めて、それが結果的に、彼女たちを騙す事になったんじゃないのか？」

平助は、瞬きもせず、私を見つめていた。私は続けた。

「私は、水野ハナに出会い、彼女の命じるままに動いて、やっと悪夢から解放された。君も、悪夢から解放されたいなら、どうすれば、彼女らに役立つことができるのか、考えたほうがいいんじゃないか？」

「彼女らって……」

平助は、床に膝をついて、涙をぬぐいながら叫んだ。

「一体、何人いるんですか。それが全部、俺のせいなんですか！」

確かに……。

もし戦争がなければ、彼は、かつて恋仲だったユキが、戦友に犯されるのを止められなかった罪悪感とも無縁だったろう。戦争で金鷄勲章を授けられなければ、苦しい状況にあ

る女たちが彼を頼ろうとはしなかっただろう。まして、見知らぬ朝鮮半島で妊産婦を射殺することなどなかった。

戦争がなければ、橋口平助は、生まれ育った村で、実直な農夫としての一生を全うしたはずだ。

戦争がなければ、家族を失った、あるいは家を失った無数の人々の悲劇は、起こらなかったのだ。

「わからん」

私は、平助にではなく、自分に言い聞かせるように言った。

「私も君も、戦争で大勢の人を殺している。殺した敵兵にも、大勢の家族や友人がいた。殺した数だけ、大勢の心に悲しみを植え付ける。もちろん、私も君も、好きでやったわけじゃない。お国の命令でやった。でも、大勢の人間を悲しませた。誰の命令でやったか、そういう事は、殺された人間にとって、それは、たいした問題じゃない」

語る事によって、自分の考えがまとまってくるのを感じた。

「私たち男は、誰かに命ぜられないと、人を殺さない。人を殺すことを正当化する理由を、自分ではないものに求める。お国のためだとか、上官の命令だからとかね。でも、あの女たち、ハナ、ソヒョン、ユキ、春燕は、そうじゃない。彼女らは……」

その言葉を、口にするのを一瞬躊躇ったが、思い切って口にした。

「正義のために、戦ってる」

正義……。

何が正義か？

大日本帝国が、列強の圧力をはねかえして、存続することが正義か？

私はそう、教わってきた。だが、違う。

正義とは、国ではなく、一人ひとりの心に抱くべきものだ。

「橋口さん……」

私は言った。

「君も、もう一回、お国のためじゃなく、誰かのために戦ってみないか？」

「え？」

平助は、虚を突かれたような顔になった。

「たとえば……」

私は、少し考えてから言った。

「ユキさんは今、何か大きな事をなそうとしている。それが何かは分からない。だが、その彼女のために尽力することが、君にとって罪滅ぼしになるかもしれない」

「そうでしょうか……」

平助は溜息をついた。面差しには迷いが感じられたが、一方で、眼の光を取り戻しつつあるように見えた。

この男は、私の同類だ。そう確信が持てた。

「ユキさんが帰ってきたら、そのあたりを話してみたら、いいかもしれないよ」

私はそう言い、窓の外を見た。何時しか、夕刻が近づいていた。

「まあ、一杯やろう」

私は、食器棚からグラスを取り出し、ウオッカを注いで平助に渡した。

その後、橋口平助はやや元気を取り戻し、食事も、少しずつだが摂るようになった。

春燕は相変わらず無口で、ほとんど私たちとは話をかわさなかった。時折、庭で拳法や刀術の稽古をする他、外に出ようともしない。

ユキとソヒョンが帰ってきたのは、予想より早く、四日後の朝だった。

憔悴しやうすいしきった面差ししやうさしのユキは、家に入るなり食堂のテーブルに坐り込んだ。ソヒョン

は、俯き加減で持ち帰った荷物を整理している。私は、ソヒョンに小声で問うた。

「何か、あったのか？」

ソヒョンは、ちらりとユキに眼をやり、答えた。

「増世策、死んだ」

ユキの夫であり、水賊の狩猟が……。

思わずユキを見やった。ユキはテーブルに頬杖ほおづえをつき、虚空を見つめていた。その眼から涙なみだが零こぼれ落ちた。

「真的ヂェントクワイマー嗎マ（本当か）！」

春燕が叫んだ。ユキは頷き、テーブルに顔を伏せて、しゃくりあげはじめた。春燕がユキに寄り添って肩を抱いたり、背中をさすったりするなか、ソヒョンが説明した。

「ロシア軍、ハバロフスクの、朝鮮人村、襲おそった。増世策、捕おまった。首、斬きられた」

抵抗する馬賊に手を焼いたロシア軍が、本格的な討伐に乗り出したのだ。増世策が襲撃されたのは、馬賊たちが増に依頼して水運を利用し、連絡を取り合っていたからだろう。

馬賊同士の関係を寸断し、確固撃破を目論もくろんでいるのだ。

「生き残りの水賊に依頼して、平助が哈爾濱ハルビンにいるとの噂を流してもらったけれど、このぶんじゃ果たして、ハナさんに届くかどうか……」

そう言っつて俯くユキに、私は思いきって、洗濯屋の崔と一緒に齊齊哈爾チチハルに移動し、ハナを探すという策を提案した。

「そうね……」

ユキは顔をあげて涙を拭ぬぐい、思案をめぐらしていたが、やがて決心したように言った。

「いい案かもしれない」

そして、私とソヒョンを見比べながら言った。

「菊池さん、そうしてください。私はここで、春燕と平助、三人で待ってるわ」

それからソヒョンに向かつて、

「あなたは、菊池さんを守ってあげて」

と頭を下げた。ソヒョンは、穏やかな面差しで頷いた。ユキも笑顔になり、私に向かっ

て言った。

「この娘にはずっと、頼りっぱなしかったわ。ありがたかった」

ソヒョンは無言で俯いた。唇には笑みが浮かんでいる。何があったかは分からないが、どうやら、四日間旅をともにした事で、わだかまりが消えたようだった。

「平助さん」

何時しか、橋口平助が、食堂の隅に立っていた。彼に向かってユキは言った。

「申し訳ないけれど、もう少し、ここにいてちょうだい」

平助は、一瞬、私に眼差しを走らせ、それからユキに歩み寄り、

「俺に出来る事は、なんでもする」

と頭を下げた。

「ユキのために、がんばる。まっとうな人間になって……」

平助は、ソヒョンと春燕に向かって言った。

「償いたい」

すぐさま私は、ソヒョンを連れて崔の洗濯屋に向かった。崔の店はきれいすっかり片付けられていた。洗濯道具は大人車に積まれ、いつでも運び出せるようになっていた。

「おお、菊池さんか。もすぐ、お別れね」

という崔に、私は、

「実は、一緒に斉齊哈爾まで行きたいのだ」

と申し出た。驚く崔に私は説明した。私とソヒョンが以前、世話になった客棧クウチヤン（旅館）の太太タイタイ（女主人）と、今回の騒ぎで生き別れになっていたが、斉齊哈爾にいるらしい事がわかった。是非、再会したいのだ、と。

崔は大きく頷き、

「いいよ。出発、明日ね。今日のうちに、ロシア軍に届けとく」

すぐに承知してくれた。

「旅は道連れ、菊池さん一緒、心強いけれど、でも……」

十二歳のソヒョンを見やって、崔は心配そうな顔をした。

「この子、大丈夫か？」

「ナクシヤナア（私は大丈夫だよ）」

ソヒョンは侮辱されたように口を尖らせたが、崔は首を縦に振らなかった。

「菊池さん、ロシア軍がこの哈爾濱ハルビンから斉齊哈爾に移動する理由がわかった。列車襲う女馬賊の根城、斉齊哈爾にある、そこ襲って、女馬賊、殺す。そのため」

ソヒョンの顔色が変わった。

ロシア軍の移動は、水野ハナとその一味を討伐するのが目的だったのだ。崔は続けた。

「だから、大事になる、子ども、危ない」

ソヒョンは唇を噛みしめていたが、ふと、店の外で人が立ち騒ぐ声が聞こえてきた。通

りに出てみると、人だかりができていて、彼方から、羽織袴姿の大陸浪人らしい髭づらの日本人が、刀を振り回しながら、何かに追われるようにして走ってくる。

「あ、あいつ、札付きの、乱暴者」

崔が言った。

「危ない、中、入ろう」

だが、ソヒョンはその声に逆らうように、通りの中央に立ちはだかり、両手を広げた。不意に現れて行く手を遮る美少女に、大陸浪人は一瞬立ちすくんだが、すぐに気を取り直し、日本刀を振り上げて怒鳴った。

「どけ、朝鮮人！」

ソヒョンはその時、髪を三つ編みにし、白い上衣に、黒いスカートチマの朝鮮服だった。

「どかぬと斬るぞ！」

次の瞬間、ソヒョンが眼にも止まらぬ俊敏さで、男の懐に飛び込んだ。日本刀が空中に浮いた次の瞬間、男の体は空中で一回転し、仰向けに地面に投げ出された。その次の瞬間には、ソヒョンは男の胸板に跨り、拳を股間に向けて突き出し、鞞丸に命中する寸前で止めた。

「本気出せば……」

野次馬たちが固唾を呑んで見守るなか、ソヒョンは後ろを振り返り、仰向けに倒れて青ざめた顔の大陸浪人に、にっこり微笑んだ。

「きんたま、二つとも、潰れるよ」

言いながら、ソヒョンは握り締めた拳を開いて、平手で男の鞞丸をびしやりと叩いた。大陸浪人がのけぞって絶叫し、情けない声で泣きわめきながら、股間を両手で抑えてのたうち回る頃には、ソヒョンはスカートの埃を払いながら、笑顔で私たちに歩み寄ってきた。

「хорошо(素晴らしい)！」

「замечательный Корейцы Девочки(凄いぞ、朝鮮の少女)！」

浪人を追ってきたロシア軍の兵士たちも、悶絶する大陸浪人を捕縛しながら、ソヒョンを褒め称えた。野次馬からも、拍手が起こった。

ソヒョンは胸を張りながら、茫然とする崔に問うた。

「나 혼자야(私、大丈夫)？」

「この娘と戦ったら、私だって勝てそうにない」

私も口添えた。

「しかも、ロシア語、支那語、日本語も出来る。頼もしい相棒なんだ」

「なあ、ソヒョン」

崔に連れて行かれたロシア軍の司令部で、同行する許可を貰った後、傅家甸の隠れ家へと帰りながら、私は問うた。

「ユキさんとの旅はどうだった？」

「どうって？」

道ばたで摘んだ花を振り回しながら、ソヒョンは問うた。私は言った。

「君は、よく、ユキさんにつっかかっていたじゃないか。二人きりで旅をして、喧嘩しやしないかと心配だったんだよ」

おどけた調子で言うと、ソヒョンは足を止め、しばらく俯いて考え込んでいたが、やがて口を開いた。

「なあ菊池さん」

ソヒョンは真顔で、私を見上げて問うた。

「私知ってる日本の女のひと、ハナさん、ユキさん、秀子さん、静枝さん、春美さん……」
いったん言葉を切って、考えながら、ソヒョンは言った。

「ハナさんだけ、違う」

「どういう事だ？」

「ハナさん、強い」

懐かしげな眼差しで、ソヒョンは言った。

「秀子さん、静枝さん、春美さん」

橋口平助に「騙され」た女たちの名前を口にしながら、彼女は首を傾げた。

「強そうだけど、平助に、頼ってる。ユキさんも……」

それから、頬を赤らめ、ソヒョンは言った。

「私、好きな、男の子いた」

三歳年上の馬賊の少年と「チャダ性交」したというソヒョンの告白を思い出した。

「ユキさん、なぜ、平助、好きになたか、私、なぜ、その男の子、好きになたか、話したんで、私たち、仲良くなた」

それから、ソヒョンは、青空を仰いで言った。

「ハナさん、男のひと、好きになた事、あるのかな？」

異性を好きになる……。

私には、そんな経験があっただろうか。

武士の家に生まれ、女性と滅多に口をきいてはならないと教え込まれた。結婚相手は、親が決めた。

その間、好きになった女はいた。

だが、互いに好きあった女はいなかった。

貧しくとも、武士の家柄に生まれた誇りを叩き込まれ、女子の言う事に惑わされてはならぬと教育されてきた。

ひよつとしたら、私を好きになって、それを伝えようとしたけれど、私がそれに応じなかったために諦めてしまった女が、いたかもしれない。いなかったかもしれない。どちらでもいい。

私は、今、ハナが好きだ。

ハナに、会いたい。

ユキも、そう思っている。

ソヒョンも、そう思っている。

「なあ、ソヒョン」

私は言った。

「ハナさんが誰かを好きになった事はなくても、ハナさんを好きになって、ハナさんを求めている人間は、たくさんいるんじゃないかな」

「菊池さん、みたいなの？」

そう言つて、ソヒョンは腰を折つて大声で笑い、走り出した。走りながら笑い続け、不意に立ち止まり、こちらを振り返つて、心から嬉しそうな笑顔で、ソヒョンは叫んだ。

「私も、同じ。안「안」, 오「오」(ハナねえさん、大好き)！」

齊齊哈爾は、哈爾濱から約三百キロ北西にある。瓊瑋などと同様、城郭に囲まれた人口五万人の都市である。

数百人のロシア兵部隊が乗り込んだ列車に同乗し、哈爾濱駅を出発した私と崔とソヒョンは、客車ではなく、弾薬や武器を積んだ貨物列車の一隅をあてがわれた。扉を開けて外を見ると、ひたすら平原が広がるばかりで、わずかな起伏もなければ、一本の灌木も生えていない、退屈な光景が延々と続いた。

陽気で世話好きな崔は、おしゃべりを続け、私は耳を傾け相づちを打った。一方、ソヒョンは、私たちに背を向けて丸まり、ひたすら眠っていた。

駅は、城郭に囲まれた市街から離れた位置にあった。まだ開通したばかりで、仮ごしらえの煉瓦造りの駅舎とプラットフォームがあるばかりだった。

列車が止まると、ロシア兵たちは客車から降りて入城の準備を始めた。私たちは、市内のロシア軍司令部に到着を告げる役目の連絡将校に同行して、一足先に齊齊哈爾に入る事になった。

城郭は四方に門が穿たれている。私たちを乗せた馬車は、南門をくぐり抜けた。繁華街には多くの店が並んでいたが、人影はまばらだった。哈爾濱同様、多くの支那人は逃げ出してしまい、街はロシア軍が制圧したも同然だったのだ。

司令部に顔を出し、崔は店開きの許可証を貰つて外に出た。

「菊池さん、ソヒョンさん、どする？」

崔は、大陸浪人を瞬時に倒して悶絶させたソヒョンの腕前を見て以来、すっかりさん付けだった。

「落ちつくまで、私の家にいてもいいよ」

「いや、ホテルを探します」

私はそう言い、崔の手を握つて、

「崔さんには大変、お世話になりました。我々もしばらくここに滞在するでしょうから、また、お店に顔を出します」

と頭を下げ、ソヒョンはロシア式に、崔の頬に自分の頬をくっつけ、彼を喜ばせた。

「트맨나호, 옹가ムン아가신 하르빈, 옹가ムン아가신 (また会いましょう、勇敢なお嬢さん)！」

崔はソヒョンにそう言うのと、洗濯屋の道具一色を乗せた馬車を操り、一礼して去っていった。

「では、宿を探るか」

と歩き出そうとした私の袖を、ソヒョンが引いた。

「どうした？」

「あの男……」

凝視するソヒョンの眼差しの上に、一人の支那人が、周囲を見廻しながら、ロシア軍司令部の玄関から出てきた。私たちの存在に気付かぬまま背を向け、歩き去っていく。

「誰だ？」

私はそつと問うた。ソヒョンは耳打ちした。

「仲間の馬賊」

仲間？

ということとは、ハナの部下だ。

ハナの部下が、なぜ敵対しているロシア軍司令部に？

私とソヒョンは、そつと男の後を尾けはじめた。

男は、繁華街に足を踏み入れ、けばけばしい極彩色の装飾を施し、雪洞のさがった建物に入っていった。娼館のようだったが、出迎えたのはロシア人女性ばかりだった。

私とソヒョンは顔を見合わせて頷いた。やはり、男はロシア軍から貰った大金で、女を買うつもりなのだ。

「あいつ、沈」

ソヒョンは、険しい面差しで、囁いた。

「昔からの、仲間」

そんな者までが、裏切ったというのか……。

ハルビン 哈爾濱まで武名を轟かせているハナだったが、強大なロシア軍相手に、二ヶ月近くも戦い続けてきたのだ。どれだけ苦しい状況に置かれているのだろう。

一時間も待っただろうか。ふと見ると、沈が娼館から出てきた。肩をいからせ、鼻歌をうたっている。

再び尾行を始めた。

繁華街を出て、薄暗い路地に入った沈は、壁に向かって立ち小便を始めた。

あたりに人気がない。今だ……。

そう思った瞬間、ソヒョンの小柄な体が音もなく動いた。小便を終え、振り向いた沈が、不意に現れたソヒョンに驚くと同時に、苦痛に顔を歪めた。ソヒョンの右足の爪先が、沈

の股間に撃ち込まれていた。

両手で股間を抑えて座り込んだ沈が、やっと顔をあげた時には、すでにその喉元にナイフが突きつけられていた。

「你（お前）……」

ソヒョンは笑顔で言った。

「要我的拷打（私の拷問を受けてみたい）？」

沈の面差しが恐怖に歪んだ。全身をがたがた震わせながら、沈は呻くように声を絞り出した。

「清原 涼我、大姐大（許してください、姐さん）」「清原涼我、大姐大」

泣きながら、沈は繰り返した。

沈は、もともとハナを裏切るつもりはなかった、と涙ながらに訴えた。昨日、斉齊哈爾にロシア軍が進駐するという報に接したハナは、長年の部下であり信頼する沈を、偵察に出したのだった。だが、斉齊哈爾に入って、あまりにも数多くのロシア軍が集結している事を知った沈は、恐怖がこみあげた。

すでにハナの部下は、十人にまで減っていた。多くは戦死し、または逃亡した。各地に隠して蓄えていた食糧や武器、弾薬も底をつきかけている。

一方のロシア軍は、大量の武器——大砲、機関砲、小銃、手榴弾を運び入れ、士気も旺盛そうだった。

もう限界だ……。沈はロシア軍司令部に駆け込み、ロシア側のスパイとなることを約束した。ロシア軍司令官は沈に、いったん根城に戻り、ハナを騙して斉齊哈爾に誘き出すよう命じた。ハナを罠にかけようというのである。

すべてを白状し、待ち受ける運命に怯える沈を見ながら、私はソヒョンに問うた。

「どうする？」

「私、勝手に、処罰、できない」

ソヒョンは言った。

「沈に、ハナさんとこまで、案内、させる」

それからソヒョンは、

「菊池さん、馬車か荷車、手に入れて」

と頼んだ。私は、市街に戻り、崔の洗濯屋を訪ねた。

「おお、菊池さん、早速、来たね」

と喜ぶ崔に、私は言った。

「例の客棧（旅館）の太太（女主人）なんだが……」

「ああ、探してる、女の人」

「ここからちよつと離れた村にいる事が分かった。すぐにも探し当てたいんだ。どこかで馬車が手に入らないだろうか」

「そかそか、じゃあ、私の馬車、売てあげる、私、新しいの、買うから、大丈夫」
幾度も崔に感謝して、私は馬車を走らせた。

ソヒョンは城門の手前で待っていた。沈は、まだ股間が痛むのか、座り込んだまま動かない。

「逃げよとしたから、また、きんたま、蹴った」

ソヒョンは笑った。

私とソヒョンは、青ざめた顔で苦痛に耐える沈を馬車に押し込んだ。その後、私は御者台で馬をあやつり、ソヒョンは幌付き荷台の手前、すなわち私のすぐ後ろに、沈と並んで座った。城門を出た後は、沈の示す方向に馬を走らせた。

私たちは、太陽が動く方角に向かって走った。途中、一夜野営し、翌朝から再び馬車を走らせ、やがて日が西に傾いた頃合いに、大興安嶺の山脈が地平線を覆い始めた。ハナたちの山塞は、その山間にあると言う。

「なあ、沈」

不意に、大興安嶺を見つめながら、ソヒョンが日本語で言った。

「私、ハナさん、久しぶり、逢う、嬉しい」

一夜明けてもおさまらない牽丸の痛みに、時折呻いていた沈が、息を呑んだ。彼はどうか、日本語も理解できるらしい。

恐らくソヒョンは、私にも聞かせたいと思って、支那語ではなく日本語で喋っているのだろう。

「お前、嬉しくないか？」

沈は答えなかった。ソヒョンは続けた。

「お前、仲間、十人になるまで、ハナさんと、一緒、戦った。ハナさん、好きだから？」
私の背後で、嗚咽が漏れた。沈だった。ソヒョンはさらに問うた。

「私、ハナさん、助きたい。お前たち、助きたい。どうすればいい？」

「ソヒョン！」

沈が叫んだ。

「ロシア軍、強い。勝てない！」

「そか……」

「ロシア軍、ハナさん、許さない！」

「なぜ？」

「女だから」

そう沈が口にした後、しばし沈黙が続いた。

やがて、沈が言った。

「高老爺、十日前、捕まって、首斬られた」

ソヒョンが息を呑む気配が背中に伝わってきた。言うまでもなく、ハナたち馬賊の首領である。沈は続けた。

「ハバロフスクの、ロシアの総督、主な馬賊に賞金、かけた。高老爺の首、賞金、かかってた。増世策と同じ、銀貨二万ルーブル」

ロシアのお金である二万ルーブルは、日本のお金に直すと、私の陸軍中尉時代の年収と同じくらいだ。首領だけに、高額な賞金がかけられたのだろう。

沈は続けて言った。

「ハナさん、十万ルーブル」

私は驚いて振り返った。ソヒョンも眼を丸くしている。ハナの首領である高鷹老爺の五倍の賞金だ。

即ち、ハナの首には、かつての私の五年分の給与の価値があるということなのだ。

「そのくらい、ロシア、ハナさん、憎んでる」

「沈……」

ソヒョンは静かに問うた。

「劉春燕の賞金、いくら？」

なぜ、ソヒョンはそれを問うたのだろう。意図をはかりかねていると、沈が答えた。

「十万ルーブル」

ハナと同額か……。

ふと、私は気づいた。

もしハナが、私たちの説得に応じて哈爾濱に赴けば、ユキだけでなく、春燕とも顔を合わせる事になる。ロシア軍から十万ルーブルもの懸賞金をかけられた二人が、その地で出会うことになる。

これは、偶然なのか。それとも、誰かが仕組んだ事なのか？

「そか」

ソヒョンは、静かにそう言った。振り返るとソヒョンは、右足の膝に右腕の肘をつき、右手を顎にあて、瞬き一つせず、必死に考えているようだった。

私と眼があっても、ひたすら、虚空を凝視し、考えていた。

やがてソヒョンは、私を見た。

「あたし、考えても仕方ない」

決めるのは、ハナさん。そう言って、出発するよう私を促した。

やがて太陽は冲天に昇り、西に傾きかけた頃、大興安嶺の山裾に着いた。そこで馬車を放棄し、人一人通れる幅しかない狭い山道へと入った。馬は荷車から外してソヒョンが曳き、私は荷物をリュックに入れて担いだ。

沈は先頭を歩かされた。まだ股間の痛みが去らないらしく、時折、呻き声をあげると、

「お前、荷物、ない、泣くな」

とソヒョンが叱りつけた。

やがて日が沈み、ソヒョンは用意していた松明をともして歩いた。

すっかり夜が更けた頃、不意に向こうの木の間暗がりから、あかりが三つ、現れた。

ソヒョンが沈に松明を渡した。沈が松明を三度振った。

「明白ミンバク了イル（了解）！」

暗がりから声がした。聞き覚えのある声だった。二つのあたりが近づいてきた。見ると、ハナの一の部下である宋紀だ。仲間の馬賊を二人、連れている。

「ソヒョン！ 菊池大人！」

宋紀は、私たちを確かめ、嬉しそうに顔をほころばせた。それから沈に、

「辛苦シンク了イル（苦労さん）！」

と声をかけた。沈は、無言で頭を下げた。宋紀はまだ知らないが、彼はこれからハナによつて、裁かれる身なのだ。

狭い山道を抜けると、広々とした斜面が広がり、所々に大きな洞ほらが穿うがたれ、住処すみかや倉庫になつていた。

六つの松明が私たちを出迎えた。この山の斜面の洞を根城にする馬賊たちだ。

「르（姉さん）！」

馬賊たちの中央に、手を腰にあてて立つ水野ハナを見るなり、ソヒョンは朝鮮語で叫んで駆け寄り、抱き付いた。

「카타워 아 아 아（おかえり、ソヒョン）！」

ハナも朝鮮語で答えて、ソヒョンを抱きしめた。

闇のなかで面差しはよく伺えないが、松明に照らし出されたハナは、少し痩せたようだった。眼のあたりに小さな皺しわができている。

ロシア軍相手に戦い続けてきた疲れが、その美しい顔に滲じんでいた。

胸がいっぱいになりながら、ハナを見つめていると、私に気づいた彼女は、

「お前も、来てくれたのか」

と微笑んだ。

私は不覚にも、眼から涙をこぼした。ハナは、ソヒョンと眼をあわせ、びっくりしたように見つめあっていたが、二人同時に嘔むき出し、腰を折って笑った。

「相変わらずだな！」

ハナは大股に私に近づき、首に両手を回して、私を抱いた。

「帝国軍人のくせに、泣き虫小僧。でも……」

ハナは、私の右の頬ほおに彼女の左の頬を押し当て、

「それが、お前のいいところ」

と囁ささやいた。

できうることなら、ハナを抱きしめ返したかった。だが、できなかった。そんな事はせぬように、私は躡しけられてきたのだ。

ハナは、私から身を離し、二度、肩を叩いた。それから、宋紀らに向かって頷いた後、その傍らでうなだれている沈に、

「フライルクーア回来了（おかえり）！」
と声をかけた。

その瞬間、沈がハナの足下に駆け寄り、土下座した。

「チンユンソリアン清原 涼我、クイタイ太太（許してください、首領）！」

と幾度も繰り返し、地面に額を打ち付ける。驚くハナに、ソヒョンが言った。

「沈、裏切た」

「え……？」

ハナの顔が強ばった。ソヒョンは言った。

「こいつ、ロシア軍に、ハナさんの事、売った」

ハナは、面差しを堅くしたまま、しわがれた声で沈に問うた。

「ツェンマフサイ怎麼回事（どうしたこと）？」

答えぬまま、地面に額を打ち続ける沈の頭髪を掴んで顔をあげさせ、ハナは叫んだ。

「ツェンマフサイ怎麼回事、アイ唉（どういふことなの、ええ）！」

「ソヒョン……」

ハナは、棒立ちになったまま、天を仰いで言った。その眼からは涙が溢れていたが、それを宋紀たち部下には見せたくないようだった。

その右手には拳銃が握りしめられ、足下には、つい今、彼女がこめかみを撃ち抜いた沈の死体が横たわっている。

沈は、すべてを自白し、シヨウチウ従容として死を受け入れた。クイタイ太太（女首領）に殺されるなら幸せ、とまで言った。

ソヒョンは、そっとハナに歩み寄り、背中から抱きしめた。ハナは、しばらくお腹に回されたソヒョンの両手を握りしめていた。宋紀や他の馬賊たちもうなだれている。

長年の仲間としか分かち合えない、沈についての思い出があるのだろう。

「じゃあ……」

ハナは、涙をぬぐって、ソヒョンから離れ、私に向かって言った。

「あんたとソヒョンが、ここに来た理由を話してくれるかな」

それから、沈の死体を見やって言った。

「今後の方針を決めなきゃならない」

焚き火がたかれ、ハナとソヒョン、馬賊たちが火を囲んだ。私の説明を、ソヒョンが支那語に直して、通訳した。

「なんだって！」

私とソヒョンが、ニコリスクで三原ユキと再会した事を話すと、ハナは立ち上がり、しばらく無言で虚空を見つめていたが、やがて私に駆け寄り、ぼろぼろ涙を流しながら、

「本当なんだな」

と私の腕を掴んだ。

「本当に、ユキが生きていたんだな！」
と両手で顔を覆おおって号泣した。私はソヒョンを見やった。ソヒョンも泣いていた。かえって恐ろしかった。彼女が橋口平助はしぐちへいすけと幼馴染おきななじみで、今も哈爾濱ハルビンで一緒にいる事、水賊の首領である増世策ツシヤイツウの妻となり、ロシア軍将兵を多数暗殺し支那人虐殺の引き金をひいた劉春燕リウチュンインと同志的関係である事、そして、ユキと春燕は、何かをなすために哈爾濱ハルビンにハナが来ることを望んでいる事。

どう伝えれば、ハナが冷静に受け入れる事ができるのか。

「それで……」

ハナは、泣きじやくりながら顔をあげた。

「ユキは、どこにいるの？」

私は答えた。

「哈爾濱だ」

「元気なの？」

「ああ」

「哈爾濱で、あの子、何をしてるの？」

「実は……」

私は、息を吸い込んだ。ソヒョンを見やった。ソヒョンは、全部正直に言いなさい、というような面差しを作った。

私は言った。

「橋口平助と一緒にだ」

「それで……」

私が全てを話し終わった時、ハナは、焚き火の側に座り込んでいた。頬に幾筋も涙の跡がついていて、鼻が赤かった。涙で腫はれた眼を瞬まばたきもせずに見開いていた。

しばしの沈黙の後、やがてハナは口を開いた。

「お前は、私がどうすべきだと思う？」

私はしばし考え、

「ソヒョンの考えを聞きたい」

と言った。ソヒョンは眼を丸くしたが、ハナに促され、彼女は立ち上がった。

「ハナさん、劉春燕リウチュンイン、懸賞金、十万ルーブル」

支那語でまず言った後、日本語で言った。馬賊たちがどよめいた。ソヒョンが続けた。

「ロシア軍、一番憎んでる敵、ハナさんと、春燕。その二人、一緒になる」

「つまり……」

ハナは言った。

「あたしと春燕と一緒にいるところを襲撃すれば、うまくいきや、二十万ルーブル稼げるわけか」

あたしも偉くなったね……、とハナは笑った。

「春燕みたいな奴と、同じ額つてのが気に入らないけど、まあ、あいつより下じゃないんだから、それでよしとするか」

そう言つて口を嚙み、しばし黙した後、叫んだ。

「火急出潑フッオチイチウーポオ（すぐ出発するよ）！」

驚く馬賊たちに、ハナは続けて叫んだ。

「哈爾浜ハルビン！」

それから、私とソヒョンに向かつて、はにかみながら言った。

「やっぱり、あたし、ユキに逢いたいんだ」

そしてすぐに、ほころんだ顔を引き締めた。

「春燕チュンイエンとのことも、決着つけないとね」

（つづく）